

リバーウォークの魅力と創造—川を活かした都市再生

著者：吉川勝秀 出版社：鹿島出版会

日本において河川は、都市計画・整備の関係者の対象の外にあった。同様に、都市計画・整備は、河川管理の関係者の対象の外にあった。河川管理者の主眼・対象は、都市の水害を防ぐことにあり、沿川の土地利用や都市整備は対象外であった。このため、東京の河川などに見られるように、河川空間が適切に都市空間を形成していない、あるいは水と緑という貴重な空間が都市の中に構成されていないのが実情である。

河川は、道路・街路や建築物のように、人が計画・デザインしてつくる人工公物とは異なり、基本的には自然公物であり、都市の水害防止、河川舟運（物流、人の移動等）などといった歴史を経て形成されてきたものである。したがって、この自然発生的で歴史を経て形成されてきた河川への働きかけは、限定されたものとなるが、人工的に創造できて重要な役割を果たすのが“リバーウォーク（川の通路）”である。

リバーウォークは、人々（市民、観光客等）と河川の接点、都市と河川の接点として、さまざまな形態で都市の中に存在し、魅力あるものとなる。それは、本書で紹介される欧米や日本・アジアの都市の多く事例からも裏付けられることである。すなわち、都市と河川を結びつけ、河川を都市の貴重な空間とするうえで、また、都市の側からみると、河川を都市の軸、重要な構成空間とするうえで、リバーウォークは重要な役割を果たす。

本書は、リバーウォークから都市を眺め、教育の面でも行政実務の面でも全く別々の分野であった“都市計画と河川管理の融合”を目指し、河川の再生、川からの都市再生を考え、これからの河川管理の方向性について提言している。また、都市と河川を結びつける必須の装置であるリバーウォークを、現在の断面でみるだけでなく、歴史的な視点も踏まえながら、都市と河川の係わりから考察し、豊富な事例を交えて紹介している。

河川行政においては、日常的な河川管理のために河川管理用の通路が設けられてきた。それを設置する視点は、これまでは河川法の目的に対応して、もっぱら治水が重視されてきた。これからの時代は、治水・利水・環境という河川管理の目的と視点に、“河川利用”を追加することが求められると言えよう。

河川の管理に携わる行政関係者、都市計画や地域づくりに携わる行政関係者、河川工学および都市計画を学ぶ学生や教員などが、都市と河川の融合について学び、それを実践していくために、この本は有用な書となる。

主要目次

- 第1章 リバーウォークから都市を眺める
- 第2章 都市の中の河川—なぜ都市の中に川が流れているか、しかも広い面積を占めているのか
- 第3章 リバーウォークの形態
- 第4章 河川と都市の関係—河川舟運からの考察
- 第5章 リバーウォークから都市の再生へ

出版社：鹿島出版会

定価2,835円（本体 2,700円＋税）

A5判152頁

ISBN978-4-306-07288-6

